

会報

秦 野

令和6年9月1日 第59号



昭和35年第13回たばこ祭（白黒写真をカラー化・写真提供：秦野市）

NPO 法人 秦野歴史おこしの会

白笹稲荷の由緒



白笹稲荷神社宮司
金子祥之

皆この稲荷祠を祭る」とあります。

当社の鎮座地である秦野市今泉字
芹沢小字一貫田は、その地名に相応し
く江戸時代の地誌や古地図により室川
に添い社を取り巻き水田が点在し、そ
の水田は川下へと続いていた事が知ら
れています。また、社周辺には人間の
生活痕を窺わせる横穴、石器、土器の
出土もあり、鎮座地の周辺一帯には古
代から先住民達が暮らしていたことを
示しています。

境内地南東部にある白笹たまゆら
の泉一帯はゲンジボタルの生息地にな
っており、今なお丹沢山塊からの伏流
水が所々で湧き出し、日量約五千トン
が室川に流れ込んでいます。

当社創建については詳らかではあ
りませんが、古くは白(しら)笹(ささ)
稲荷(いなり)と称していました。

天保十二年(一八四一年)に編纂さ
れた「新編相模国風土記稿」に「白笹
稲荷と号す、祭神倉稻魂命、例祭二月
初午の日及六月廿八日(中略)神主
栗原主水 白川家配下なり(以下略)」
とあります。

正保二年(一六四五年)に今泉村峯
分地頭旗本鵜殿藤助の要請により名主
蘆川氏が鵜殿氏の知行所に祀ってあつ
た稲荷社を当地に勧請しました。同年

「今度白笹稲荷并之新林為末代附置物
也」とあり鵜殿氏から林地の寄進を受
けた後も田の寄進や安堵の記録があり、
鵜殿氏の当社に対する崇敬の篤さを窺
い知ることができます。

また、当社の棟札に「奉造立白笹稲
荷大明神」正保五年戊子年卯月・吉日
(一六四八年)に社殿を造営した記録
が残っています。

安永三年(一七七四年)には「正一
位稲荷大明神安鎮之事」とあり、稲荷
神社の総本宮伏見稲荷大社から神霊を
合祀しました。

明治時代の神仏分離に先駆けて単
立社としての地位を確立した当社は相
模国を始め隣国の武蔵、甲斐、駿河、
伊豆、特に小田原藩からの参拝者が多
く大久保加賀守の参詣を受ける等、広
域に信仰を集め、いつからか関東三大
稲荷と称されるようになりました。

そして今年令和六年は、安永三年に
伏見稲荷大社より神璽を合祀してから
二百五十年の年を迎え、去る五月十九
日に「合祀二百五十年記念神恩感謝
祭」を斎行致しました。

この地で白笹稲荷を信仰してこられ
た先人達に感謝すると共に、これから
先も五穀豊穰と皆様の平安を祈り続け
て参ります。

鎮座地 秦野市今泉一〇八九
御祭神 宇迦御魂命・大宮賣命・猿
田彦命 合祀末社木祖社・
草祖社・祖霊社 寿老人
(南はだの七福神)
御神徳 五穀豊穰・家内安全・商売
繁盛等

当社は全国に八万社ある神社のう
ち、三万社ある稲荷神社の一社です。
江戸時代の江戸の街について書か
れている喜田川守貞の著書「近世風俗
志」には、諸国ともに稲荷明神を祭る。
(中略)江戸にては、武家および市中稲
荷祠ある事、その数知るべからず(武家
および市中巨戸、必ずこれあり。また
一地面、専ら一、二祠これあり。これ
なき地面ははなはだ稀とす)今日、必ず

特定非営利活動法人秦野歴史おこしの会通常総会を開催

山口和裕

本会の「令和六年度通常総会」が、去る五月十一日(土)、会員八十一名(委任状出席を含む)の出席を得て市立本町公民館で開催され、提出された全議案が原案どおり承認されました。令和五年度は三年に及ぶコロナ禍を乗り越え、市内・外の視察研修や講演・学習会をはじめ、本来に近い活動ができたことが報告され、六年度事業計画でも「文化財に関する支援事業」、「市民に向けた教育事業」、「市民と文化財をつなぐ広報・啓発事業」を三本柱として会員・市民向けの活動を展開することとしました。

また、任期満了による役員改選が行われ、理事十二名、監事二名が選出されました。



小泉孝理事長による開会あいさつ



矢内昭夫先生の講演会

総会終了後行われた講演会は、「秦野の古文書について」と題して元県立高校教諭で、「発展！古文書・くずし字講座」の講師矢内昭夫氏を招き、「古文書」の基礎から市内に残された古文書とその現状、実際の古文書の読解等を丁寧にわかりやすく話していただきました。矢内講師は今後の課題として「古文書の散逸」を挙げ、市史に載っている資料でさえ分からなくなっているものもあり、由々しき事態に直面している。何とかしてここでストップをかけなければ・・・と強く訴えられていました。方策として講師は、博物館へ寄贈・寄託して保存していくことがベストであるが博物館の現状のキャパシティと体制を考えると困難。次策として、既存の施設と兼用して『文書館』を創って古文書を保管し、そこを中心にし



横溝彰さんの紙芝居

て市民にもっと古文書に接してもらいう機会を増やしていったら散逸を減らせるのではないかと提起されていました。講演会は会員・一般市民あわせて約六十名が聴講し、好評のうちに終了しました。

また、講演会終了後、会員の横溝彰さんにより、自作・自演の紙芝居「土偶 ミミちゃんの願いは」が披露されました。横溝さんは「最近の新東名工事によって、縄文時代の遺跡がたくさん判ってきた。残念なのは秦野に縄文時代の遺跡はたくさんあるが「記録」でしか残されていないことである。稲荷木遺跡・菩提横手遺跡は皆新東名の下に埋もれてしまっている。縄文文化が開けていた街として、少なくとも「何々遺跡」といった表示くらいはあってもいいのでは・・・」と、熱い思いを語られていました。

特別寄稿

二百年続く上関の地神講

大木伸男

秦野市堀山下六七〇番地に明治初年まで、岩舟堂という地蔵を祀るお堂があり、その敷地の一角に文政十年（一八二七）天社神という地神塔が建てられました。碑を建てるには講中組織があり、講中の人々が資金を出し合って碑を建立したものと考えられます。それから子孫に引き継がれ約二百年間続いています。

堀山下地区上関の地神講

地神講は豊作祈願のための情報交換と農作業の休養日であったと言われていいます。講の当番（宿）には道具の掛軸と講中名簿が受け渡されます。平成三年の名簿十七戸、平成二十年版では十戸が記載されています。

営農情報は農業協同組合発足により細かく入ってくるようになりました。また天気予報も毎日見たり聞いたり出来るようになりました。このような状況となり、当番の負担を軽減したことにより、今日まで続けられたと思います。



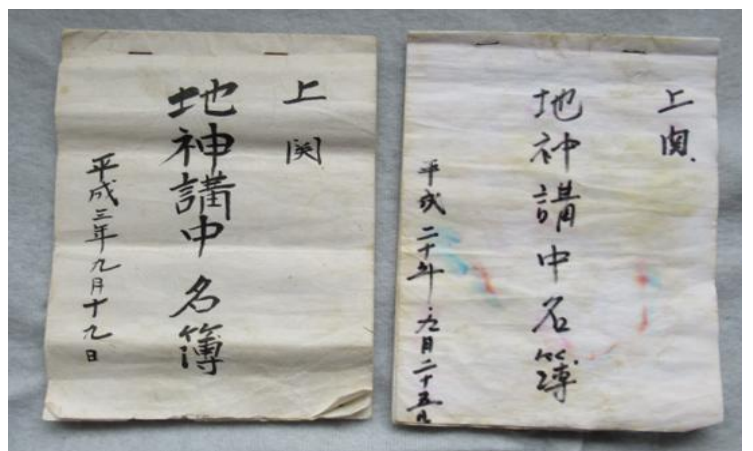
上関の地神塔

す。現在は社日の日程を確認し、講中の方々のお札の注文を確認して配布し天社神にお参りします。

井上スエ子（八十四歳）様の話し

「私が地神講に初めて参加したのは、昭和三十六年でした。講の宿は社日の日に掛軸を飾り、その前に線香とお札を供えた。講中の人は来訪し参拝すると、多くの女性はお茶を飲みながら雑談をし、帰りにお札を持ち帰りました。来られなかった家には、後日配布しました。平成十年に私の家で宿をしたが、以前と同じ方式でした。

現在の宿当番の方は社日の半月ほど前に、お札の希望を確認して宮司に注文し講中の家に配布する方式になっています。この方式になったのは、平成十二・十三年頃だと思っています。昔は「宿の家に食材を持ち寄って会食をしていた。」という話は聞いたことはあるが、



上関講中名簿



地神講掛軸



地神講のお札

何時ごろまでやっていたかは解りません。」

堀山下地区の地神講

現在堀山下地区では上関と宮久保で地神講を運営しています。

〈下 関〉 三十年程前に中止した。

〈北 庭〉 二十年以上前に四戸となり中止した。宿はお茶を出していません。そばを出したこともあります。



北庭の地神塔

〈宮久保〉 十二戸で社日の日に堀山下自治会館に集まり、仕出し弁当を取り実施しています。

〈鍛冶ヶ谷戸〉 七戸で運営していたが、十五、十六年前に中止した。



鍛冶ヶ谷戸の地神塔

〈大 倉〉 三十年程前に中止した。山の講は五十年程前に中止した。



大倉の地神塔

百観音の掛け軸

地神講の関係用具として百観音の掛け軸があり、地神講との関連は薄いような気がしました。軸の最下段に向原香集禅寺の記載があり、山北の香集寺を訪ねてみました。寺は丘の上にあります、駐車場から五十三段の階段を登ると本堂が見えます。境内を囲む壁際に西国・坂東・秩父の百観音の石仏が設置されていました。

住職に伺うと「掛け軸にある歌は当寺の御詠歌で、観音様を寄進された方々や関係者に配布されたようです。」とのこと。

坂東の石仏一番に明治十二年九月の刻字があり造立期が判明します。寄進(功德)主は個人名が二十二体、団体名が観音講中六、念仏講中一、村講中



百観音の掛軸

二、檀方中一、新詠歌連中一です。住所は山北が殆んどです。松田町が四、小田原市と開成町が二で秦野市はありませんでした。

あとがき

春の社日の日に地の神様が天から降りてきて、秋に天に昇ると言われています。農作物は天候に左右されることがあります。庭師の西村実さんは「俺は土いじりをするから地神様を大事に信仰しているんだ。」と言っていました。が、浄土の世界に行ってしまいました。太平洋戦争が始まると、天気予報が軍事機密となり敗戦まで新聞やラジオ報道から消えました。農家の方々はどうしていたのだろうか。「大山に雲がかっているから」「雨が降る等」と言えば、軍事機密を漏らしたと疑われるという生活を想像してしまいます。庶民を苦しめる戦争をしない世にしてほしい。

市内地区研修会（菩提地区の歴史と文化を訪ねる）

古谷信行

六月十一日（火）北公民館に於いて関係者合せて三十二名の参加により、菩提自治会連合会、菩提生産森林組合が保存管理する古文書と山地図の見学会が実施されました。これは、昨年の古文書見学会に続く第二弾で、特に菩提地区には江戸時代からの古文書や古地図が多く保存されています。

今回の見学会では、山の境界をめぐり近隣の村々との紛争を領主や代官所の役人に名主、組頭、百姓代の名前と共に訴状、裁許状の記録が保存されています、又絵図には絵師の名前も記録



大きな絵図を実際に広げ、説明を聞きました

されていました。

特に「宝暦九巳年（一七五九）入会山訴訟裁許につき横野・菩提両村請書」の古文書（横野文書）は、「宝暦八戌年九月十三日に作成された絵図面を以て御吟味」とあります。この紛争は、元はと言えば元禄十一寅年（一六九八）横野村の先の地頭戸田庄右衛門の知行所で、村高三百石の内、字与治ヶ谷戸、約二十五石余りを菩提村の領主米倉丹後守に領分渡しすることになった際に、百姓十一軒が菩提村の本百姓になったことで、烏尾山への秣（まぐさ）、萱、薪山の入会をめぐり、「元は横野村の百姓であった与治ヶ谷戸村の百姓が入り取っていた秣、薪などを菩提村の百姓も新しく道を作って取った」という横野村の訴えに対して、菩提村は、「烏尾山は往古より菩提村の持山で、山永（やまえい）、山手米（やまてまい）という年貢を納めて秣、薪を茹つて来たので入会ではないと主張」、元来、与治ヶ谷戸は菩提村字宮沢と言う所の小名（こな）であり、元禄十一寅年に米倉丹後守の領分になり菩提村の本高（もとだか）になったもので、横野村は新道を附けた所を菩提村より新道を附けたと偽って道の差し止めを訴えている。これについて宝暦八戌年九月十三日作成

の「出入立会絵図面を以て御吟味」とあるが、証拠として決めたいと記されている。結局この紛争は横野村が新道としている道は菩提村本道より引続きの道であり、新道とは言えず、新道と申し立ては双方とも証拠、書物等がないため申分立ち難いため、よって烏尾山境については、字与治ヶ谷戸畑林際より引き続きある峯道通り、その峯道を境に西、南は横野村秣山に定め東、北は菩提村秣山とするとの評定を一同が承知したという連判状の内容です。

次に寛文十戌年（一六七〇）の古文書「相州大住郡菩提村御縄打水帳」を拝見しました。御縄打水帳は検地帳とも言われ年貢米の徴収の基本になります。菩提村は傾斜地が多く田圃は畑の十分の一以下ですから米は余り採れません、その中でも上田（じょうでん）と言われる田圃は特に少なかったようです。菩提の御縄打水帳には、今言う田圃や畑のランクが地番と所有者の名前等細かく記されていました。寛文十年の御縄打水帳の文書は二冊ありました。

今回の市内研修会では古文書教室の講師である矢内昭夫先生の詳しい解説をいただき、参加者一同大変有意義な研修会になりました。

信州(善哉)紀行

古谷幸男

令和二年、信州松本方面に学生時代、白樺湖霧ヶ峰の想い出の地を五十年ぶりに訪ねました。車山霧ヶ峰高原、蓼科の山々、白樺湖の風景は当時と変わらず、青春時代の懐かしい記憶が蘇りました。

松本市内の居酒屋で偶然地酒「善哉」がメニューにあり、親しみを感じ店の方に「善哉」の蔵元善哉酒造(よいかなしゅぞう)を聞き、早速翌朝訪ねました。松本城近くの女鳥羽(めとば)川沿いに蔵があり、玄関前にある「女鳥羽の泉」(名水百選)の湧水を仕込に使い百年以上続く由緒ある蔵元でした。



善哉酒造の店舗

お店の正面の壁面に「善哉」タグ額が飾っていました。以下書き写します。

《表題》善哉(ぜんざい・よいかな)

この語は梵語「娑度」(Sadhu)の語意で、古代印度で決議に際し賛意を表す時に使われ、大乘仏教の經典にも用いられ、釈尊が弟子たちの意見を容認された時、又弟子たちが説法を聴聞讃カンする場合に用いられた。

語義より言えば「善」(善)は「好」



現社長
穂高啓右氏



仕込み水「女鳥羽の泉」

の別称、「哉」は感嘆の意を表す助語の辞である。依って「善哉」とは「歓喜・讃言・喜びの至り・法爾随喜(自然のまゝを尊ぶ)・わが意に叶ふ」等此意味にあたる。

清酒の標識としては得意の側からすれば、「このお酒は誠に結構である」と喜ばれ、酒造家から見れば「精選醸造していますから御気に召すでしょう」との信念をもつことになるでしょう。

眞におめでたい平和な大衆性を持つ文字であります。

昭和三十八年六月吉祥日

現社長(穂高啓右氏)によると、善哉酒造の由来は、祖父の頃は「玉川」と言う名称で、当地に滞在された学者先生のいくつかの候補から「善哉」を選ばれたそうです。また、蔵元の生い立ち等、工場内を案内して頂きました。地元では祝い酒として慶事によく使われていますとのことでした。

初対面に係わらずおかみさん(早智子婦人)が気さくな方で、地元の漬け物を頂きながらよもやま話をお聞きし、すっかり打ち解けました。私、愚妻共すっかり善哉酒造が気に入って、毎年信州方面の旅の時は必ず立ち寄るようになりました。(お酒も美味しい)

二百三十年の歴史を伝える

渋沢神社の幟

岩田宇一

秦野市渋沢地区に鎮座する渋沢神社の例大祭に揚げられる幟には、中央に「□納 八幡宮御寶前」と大書されています。その下には、「寛政七乙卯歳三月吉日 昭和二十八年四月吉日再調

相州大住郡澁澤村 氏子中」と書かれています。この事からこの幟は江戸時代の寛政七年（一七九五年）に最初に作られたものが幟が傷むたびに、新たな幟に前の文言を忠実に再現されて今日に至ったものと思います。渋沢神社の旧社名は若宮八幡宮で、明治に村社渋沢神社に改名されました。

秦野市史第一巻（古代・中世寺社史料）によると明和八年（一七七一年）に八幡宮造立棟札、八幡宮造立寄進者連盟棟札があり、神社の社殿が造られて二十四年後にこの初代幟が作られた事になります。来年（二〇二五年）は



渋沢神社の幟

初代幟が誕生してから二百三十年の節目の年になります。秦野市内にこのような歴史を伝える幟がある事を秦野歴史おこしの会の会員の皆様と秦野市民の郷土史に興味を持たれている方々にお知らせします。

来年の渋沢神社の例大祭は四月中旬の休日に施行されると思いますので、ぜひ歴史を感じる幟を見ていただきたいと願います。

★新入会員です よろしく

岩崎	忠雄	北地区
中村	英仁	北地区
泉田	悦子	北地区
竹田	保子	北地区
藤沢	京子	東地区
山下	誠	東地区
師岡	文男	東地区
土田	絢子	南地区
内藤	和子	南地区
京川	友子	南地区
長瀬	美樹男	本町地区
梶山	隆士	本町地区
小野	文雄	本町地区
岩田	孝枝	西地区
若菜	寿々龍	西地区
藤村	富士雄	大根地区
高橋	一	大根地区
三武	英行	市外

◆表紙の題字

「善哉（よいか・よきかな）」
揮毫 蓑毛山寶蓮寺

三十三世住職 東島光明師

『寶蓮寺真名縁起』によれば、聖武天皇の命を受けた行基と良弁が、伊勢の皇大神宮に赴き大仏造立の願いが叶った時、歓喜して舞い、歌い、言ったことばが「善哉、善哉、時哉、時哉」である。・会報第三号から要約

◆定期講演会のお知らせ

令和六年九月七日（土）午後一時～

場所 秦野市立本町公民館

演題 「十日市場の偉人

～光西上人と三浦乾也～」

講師 三武英行氏（郷土史研究家）

◆鎌倉市外研修のお知らせ

令和六年十月三十日（水）

場所 長谷寺、鎌倉国宝館（特別

展覧会 鎌倉伝運慶仏、実朝公

五輪塔）ほか 詳細はチラシで

お知らせします

発行責任者

秦野市羽根七〇七

小泉 孝

電話 〇四六三―七五―〇〇六七